

兄弟のやまばと

小川未明

青空文庫

「お母さん。これから、また寒い風が吹いてさびしくなりますね。そして、白く雪が野原をうずめてしまつて、なにも、私たちの目をたのしませるようなものがなくなつてしまうのですね。なんで、お母さんは、こんなさびしいところにすんでいたいのでしょうか。」

と、子ばとは、母親に向かつていいました。

いままで輝かしかった山も、野原も、もはや、冬枯れてしまいました。そして、哀れな、枝に止まつたはとの羽にはなお寒い北風が吹いているのであります。

「おまえ、こんないいところがどこにあるう。ここにすんでいればこそ安心なんだよ。それは、もつと里に近い野原にゆけば食物もたくさんあるし、おまえたちの喜びそうな花や、流れもあるけれど、すこしも油断はできないのだ。ここにはもう長年いるけれど、そんな心配はすこしもない。それに山には、赤く熟した実がなっているし、あの山一つ越せば、圃があつて、そこには私たちの不自由をしないほどの食物も落ちている。こんないいところがどこにあるう……。けつして、ほかへゆくなどと思つてはならない。」

と、母親は、子ばとたちをいましめたのであります。

兄弟の子ばとは、はじめのうちは、母親のいうことをほんとうだと思つて、従つ

ていました。しかしだんだん大きく、強くなると、冒険もしてみたかったのであります。ある、よく晴れた日のこと、兄弟の子ばとは母の許しを得て山を一つ越して、あちらの圃へゆくことにしました。これまでは、母親がついていったのでした。けれど、めったに、そこには、人の影を見なかったので、母親は、あすこへならば、たとえ二人をやつてもだいじょうぶであろうと安心したからであります。

二羽の子ばとは、朝日の光を浴びて、巢を離れると、空を高らかに、元氣よく飛んでゆきました。そしてやがて、その影を空の中へ没してしまつた時分、母親は、ため息をもらしました。

「子供たちの大きくなるのを楽しみにして待つたものだが、大きくなつてしまうと、もはや私から離れていってしまう……。」

そして、親ばとは、独り、さびしそうに、巢のまわりを飛びまわつて、やがて子供たちの帰るのを待つていたのであります。

二羽の子ばとは、母親の心などを思いませんでした。

「兄さん、もつと、どこかへいつてみようじやありませんか。里の方へゆかなければ、いいでしょう……。」「と、弟がいました。

「そうだな。海の方へゆこうか……。そして、あんまりおそくならないうちに帰れば、お母さんにしかられることもあるまい。」と、兄は、さつそく、合意しました。二羽の子ばとは、自分たちのすることをすこしもよくないなどとは思っていませんから、すぐに、青い空を翔けて海の方へと飛んでゆきました。

ようやく、あちらに、輝く海が、笑っているのが、目にはいった時分、どこからか、自分たちを呼ぶ、はとの声がかきこえてきました。

「兄さん、どこかで、だれか私たちの仲間が呼んでいるようですよ。」と、弟が、兄を顧みていいました。

「ほんとうにな……。どこだろうか？」と、兄は答えました。しかし、兄弟は、じきに、自分たちの仲間が、海辺の丘の上で鳴いているのを知ったので、ただちに、その方へ飛んでいったのであります。

丘の上で鳴いていたとは、ずっと兄弟の子ばとよりはきれいであります。兄弟は、そのはとが、山育ちでなく、自分たちと異って、町にすんでいるはとだということを悟ったのであります。

「山の方には、なにか珍しい、そして、おもしろいことがありますか。」と、きれいなは

とがたずねました。

「いま、赤い実が熟れています。圃には、取り残された豆が、まだすこしは落ちているはずです……。」と、山からきた、兄のほうのはとがいました。

「あなたは、どこからおいになりしました？ つい、これまでお見かけしたことはありません。」と、弟が、町からきたはとに向かって聞いたのであります。

「私は、めつたにこのあたりへはきたことがないのです。めずらしく、いいお天気なものですから、海を見ようと思ってきました。」と、町からきたはとは、答えました。

それから三羽のはとは、仲よく遊びました。丘をあらにゆくと、そこにも豆圃のあとがあつて、たくさん豆が落ちていました。兄弟の子ばとは、町からきたはとに向かって、

「さあ、こんなにたくさん豆が落ちていますからお拾いなさい。」といいました。

けれど、町のはとは、それを拾おうとせずに、

「私たちは、毎日、豆や、芋は食べあきています。あなたがたが、もし私といっしょに町へおいでなさらしたら、驚きなさるとおもいます……。」

と、町からきたはとは、得意になつていいました。

山の子ばとは、不思議に感じながら、

「町には、どうして、そんなに豆や、芋などがたくさんにあるのですか？」と聞きました。

「みんな人間が、私たちにくれるのです。」

「人間が？」

兄弟の子ばとは、ますます不思議なことに感じたのであります。自分たちは人間をどんなに怖ろしいもの思っているか知らない。鉄砲を打って、自分たちの命を取るものは、人間ではないか。自分たちの仲間、これまで、みんな人間のために殺されたのではないか？ そう思うと、町からきたはどのいうことは、あまりに意外でなりませんでした。

「人間は、私たちをかわいがってくれます。そして人間の子供は、私たちといっしょに、いつも遊んでいます。もし無法なものがあつて、私たちに石を投げたり、また捕らえたりするものがあれば、そのものはみんなから罰せられるであります……。町にいるほうが、どれほど、安全であり、にぎやかであり、愉快であるかわかりません……。もし私といっしょに町へおいでなさる気があるなら、つれていってあげましょう……。」と、

まち
町のはとは、兄弟きょうだいに向かつていいました。

おとうと
弟は、すぐにも、いっしょにゆきたいと思いましたが、兄あには、お母かあさんが心配しんぱいなさる
だろうと思つて、考かんがえていました。

このとき、白しろい波なみが、岸きしを打つて、こちらのようすをうかがつていましたが、二羽わのや
まばとが、思案しあんしている顔かおを見て、急きゆうに、おかしくなつたとみえて、波なみは、笑わらいながら、
「よく考かんがえたがいい。考かんがえてみたがいい……。」と、叫さけんだのでありました。

きよう
「今日は、山やまのお家うちへ歸かえつて、明日あした、出でなおしてきますから、もし、明日あした、私わたしたちをつれ
ていつてくだされば、このうえの喜よろこびはありません。」と、山やまのはとがいいました。

まち
町からきたはとは、しんせつないはとでありました。

「そんなら、よく話はなしをしておいでなさい。明日あした、また私わたしは、ここへきますから。」といつ
て、その日ひは、別わかれてたがいに、山やまと町まちへ歸かえつたのであります。

あにおとうと
兄と弟のやまばとは、丘おかを越こえて、山やまの方ほうへと急いそぎました。そこには、哀あわれな母ははおや親がが、
枝えだに止とどまつて、風かぜに吹ふかれながら、子こ供どもらの歸かえるのを待まちっていました。

わ
二羽の子供こどもたちは、歸かえつてきて、今日きよう、町まちのはとにあつて話はなしをしたことを母ははおや親がに告つげ
たのであります。

「お母さん、なぜ私たちも町へいつてすまないのですか？」と、兄と弟はいいました。

「いいえ、ここがいちばんいいところです。町へなどいつてごらんなさい。一日だつて安心しては暮らせませんよ。」と、母親はいいました。

「だつて、お母さん、人間は、町へいけばしんせつで、けつして、捕らえたり、打ち殺すようなことはしないといひます。」と、兄はいいました。

「そして、町では鉄砲で打つたりすると、かえつて、その人間は、みんなから罰せられるといふことを、町のはとはいつていました。」と、弟がいました。

母親は、だまつて、二羽の子供のいふことを聞いていましたが、

「おまえたちは、そんな着物をきては、町などへゆけません。すぐに、山のはとだといふことがわかつてしまいます。町の人は、山のはとは、殺してもいいといふことになつてゐるのですよ。」といひました。

二羽の子ばとは、なるほど、自分たちの着物が、町のはとにくらべて、たしかに粗末であつたことを思い出しました。けれど、母親のいうように、着物の粗末ときれいによつて、殺されたり、殺されなかつたりすることが、あろう道理がないと考えて、母親の言を、そのまま信ずることはできませんでした。そして、翌日になると、町のはとと約

束くそくをしたことを思い出して、母親ははおやには、じきに帰かえつてくるからといって、二羽わの子こばとは、ふたたび海辺うみべの方ほうを指さして飛とんできたのであります。

町まちのはとは、もうとつくに、そこへきて山やまの兄きようだい弟だいのはとのやつてくるのを待まっていました。その日ひ、海うみの白しろい波なみは、氣きづかわしげに、三羽わのはとのようすをながめていました。そのうちに三羽わのはとは、町まちの空そらを指さして飛とんでゆきました。

それきり、二羽わの子こばとは、姿すがたを見みせませんでした。町まちにいつて、たくさん町まちのはとたちに珍めづしがられて、得意とくいになつて、山やまの話はなしをしていたものでしょうか……。兄きようだい弟だいのようすはわからなかつたのです。その日ひから、山やまでは、母ははおや親やの子こ供どもを呼よぶ声こえがさびしく、陰いん氣きに、毎まい日にちのようきに聞きかれました。

半はん月つきもたつた、あらしの過すぎた朝あさのことでした。海うみの波なみは、いつかの二羽わの兄きようだい弟だいのはとが疲つかれはてて、砂すな原はらに降おりてゐるのを見みました。町まちから、無ぶ事じに帰かえつたものと思おもわれます。

「こんなに、朝あさはや早くどうしたのですか？」と、波なみは、二羽わの疲つかれはてた兄きようだい弟だいに向むかつてたずねました。

すると、兄あには、だいぶ傷いたんだ翼つばさをくちばしで整ととのえながら、

「町の空は、真つ赤だ。いつか、ここへきたはとも、いまですんでいた寺も、みんな焼けてしまった。私たち二人は、やつと逃げて、ここまできた。」と、息をせきながら、いきました。

波は、この話をきいて、びつくりして、空へ跳ね上がって、かなたの空を見ようとした。

その間に、二羽のはとは、山の方を指して飛んでいったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「未明童話集 第5巻」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「教育の世紀 4巻1号」

1926（大正15）年1月

※表題は底本では、「兄弟《きょうだい》のやまばと」となっています。

※初出時の表題は「兄弟の山鳩」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2020年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

兄弟のやまばと

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>